

第62回国民体育大会柔道競技

平成19年10月7日(日)～9日(火)

(於)秋田県立武道館

第62回秋田わか杉国体

本年の国体は、秋田県秋田市の秋田県立武道館に於いて10月7日(日)から9日(火)までの3日間、盛大に開催された。

我が都柔連は、8月に行われた関東ブロック大会を少年男子・少年女子・成年女子共に優秀な成績で勝ち上がり、成年男子と合わせ4部門全ての出場権を獲得した。

昨年、一昨年と総合優勝している都柔連にとって、今年は“三連覇”という大きな目標に挑む大会であった。

初日に行われた少年女子は、大将の上村凜歩選手が57kg級の選手であることが不安材料であったが、まさにその不安が的中してしまった。

東京都は昨年優勝したので2回戦からの登場であったが初戦の静岡県との一戦で、先鋒、中堅と引き分けてしまい、大将の上村に全てを託したが払巻込から崩袈裟固の合わせ技で敗れ、敗退してしまった。

昨年は三人の選手がそれぞれ自らの役割を果たし、見事優勝したが今年は力を発揮する前での敗退となり、今後に大きな課題を残した。

続く成年女子は、先鋒 君島奈津子選手、中堅 中川愛子選手、大将 手島知佳選手と、昨年と全く変わらぬ警視庁のメンバーで固めた。1回戦の滋賀県には2対0、続く、準々決勝選では代表戦となり、中川選手が、谷本選手に旗判定で何とか勝ちを収めた。

準決勝戦では地元秋田県と対戦し、先鋒の君島選手が切れ味鋭い袖釣込腰で一本勝ちを収めたが、続く、中川、手島の両選手が敗れ、三位決定戦に回ることとなった。

三位決定戦は兵庫県と対戦したが、手島選手が堀江選手に敗れ、四位が確定した。

少年男子は同じく7日に1,2回戦が行われ、東京都は2回戦に出場した。今年のメンバーは、先鋒 山本浩史選手(足立学園高) 次鋒 鈴木誠選手(国土館高) 中堅 川上智弘選手(足立学園高) 副将 寺島克興選手(国土館高) 大将 百瀬優選手(国土館高)というメンバーで臨んだ。2回戦の山形県との戦いでは5対0と圧勝し、翌日に希望をつなげた。8日は準々決勝戦からの登場であったが、広島県と当たることになった。広島県チームは例年、崇徳高、近大福山高の選手が中心となり、今年も大将にはインターハイ100kg超級で優勝し、更に9月の全日本ジュニアも制した上川選手(崇徳高)がいるだけに、苦戦が予想された。しかし、先鋒の山本選手、中堅の川上選手がそれぞれポイントを挙げ、副将の寺島選手が引き分け、東京都の準決勝進出が決まった。大将戦は百瀬選手も善戦するが、上川選手の壁は厚く、注意のポイントを取られてしまった。上川選手はやはり高校生ではNo.1の実力者であった。準決勝は石川県との対戦となったが、石川県が勝ち上がってくるのは予想外の展開であった。しかし、石川県は中堅にモンゴルからの留学生バートルガ・テムーレン選手(日本航空第二高)がおり、彼の破壊力抜群の裏投に川上選手が一本を取られ、代表戦となり、寺島選手に全てを賭けたが、やはりテムーレン選手に終了間際にポイントを取られてしまった。まさにテムーレン選手一人にやられてしまった感のある一戦であった。三位決定戦に回り、愛媛県と対戦したが、3対0と圧勝し、東京都少年男子の三位が確定した。この時点で東京都は優勝こそないものの、成年男子の結果によっては?という微妙な順位に位置していた。

その成年男子は、8日は2回戦までが行われ、東京都は2回戦で滋賀県と対戦し、4対0と圧勝した。昨年は江種、棟田、高井というワールドカップ代表3選手を擁しての圧勝であったが、今年はメンバーを全て入れ替えた。先鋒 和泉強志(セコム) 次鋒 成田泰崇(アルゼ) 中堅 青木勝士(セコム) 副将 鈴木龍(JRA) 大将 近野貞治(総合警備)というメンバーで臨んだ。当初は大将に片渕慎弥(JRA)を配していたが、怪我のため、近野選手が代役を務めた。絶対的なポイントゲッターはいないものの、和泉、成田の両選手は昨年の講

道館杯の優勝者で、若くて今一番調子の良い選手である。大会最終日の9日は秋篠宮様・紀子様をお迎えし、3回戦から行われた。東京都は静岡県に1対1の内容差で辛勝し、準々決勝戦の京都府にも1対1の内容差での厳しい勝利であった。こころへんにポイントゲッター不在の苦しさがあった。準決勝戦は地元秋田県との戦いとなったが、0対0のまま代表戦となり、東京都は鈴木選手、秋田県は矢寄選手の戦いとなった。矢寄選手は90kg級の選手ではあるが、世界選手権を始め数多くの国際大会を経験している選手だけに組み手がうまく、鈴木選手の頭を下げさせ、容易に技をかけさせない。そのまま判定となり矢寄選手の勝ちとなり、東京都は3位決定戦に回る。3位決定戦は来年の国体の開催県でもある大分県との対戦となった。大分県は大将に穴井選手というスーパースターがいるが、東京都はよく頑張り、2対0で3位を死守する。

その結果、少年女子こそ入賞を逃したものの、少年男子3位、成年女子4位、成年男子3位と入賞し、神奈川県と並び見事同点で総合優勝の栄冠を手にすることが出来た。三連覇という偉業は達成したものの一部門も優勝のないままでの総合優勝は東京都も初めての経験であった。苦戦はしたが、それでも選手全員による総合優勝(三連覇)は見事であり、選手はもとより監督、コーチに敬意を表したい。また地元秋田県の関係者を始め、応援して下さった全ての方々に感謝の意を表し、秋田わか杉国体のご報告とさせていただきます。

競技力向上委員会委員 浜島 正剛





